

健康文化

音

今井田 二三子

遅い夕食の支度に台所に立っている折り、風もないのに軒端の瓦を打つ木の
実の音を耳にして、晩秋を感じ、何か物淋しい思いにかられることがあります。
折からの強風に煽られて彩づいた木の葉が風に舞う音、落ちた木の葉がカラカ
ラと車輪のように道路を走り抜ける音、庭先の散り敷かれた落葉を踏むカサカ
サとした音など、秋も半ば、秋も終わりと告げているかのように感じられます。
落葉の音が終わると、木枯らしが枯れ枝をざわつかせながら通り始めます。夜
半目を覚ますと、建て付けの悪い戸がガタガタと音をたて雪の訪れを告げてい
るようです。風が止み、再び静けさが戻った後は快い眠りが訪れはしますが、
翌朝、子供の頃は銀世界を思い描いて雨戸を開けたものでしたが、今は雪よけ
の労働が負担に感じられ、雪のないのを念じながら恐る恐るカーテンを開いて
います。雪を見ながら友と語らいお茶を喫するなどは夢物語であることを今や
思い知らされています。以前は雪晴れの朝は、雪ダルマ作り、雪合戦など雪と
戯れる子供達の嬉々とした声が聞かれたものでしたが、今はただ遠くに雪よけ
の音、裏の工場に入るトラックの車輪が雪や氷を踏みつぶす音が聞かれる程度
です。

音も耳にしないのに雨、これが春の音でしょうか。音とは違いますが時には
鶯が春を告げに訪れてきます。昨年は一際鳴き声の美しい鶯が訪れてきていま
した。それはサービス精神が旺盛で隣近所が皆、自宅の庭で鳴いていると思っ
てこませたほどでした。

田を耕す機械の音を耳にしますと初夏、やがて田の植え付けの季節を感じま
す。

沛然とした雨の音、勇壮な雷の轟きは夏の音です。麻は電気の伝わりを遮る
と言って私達は蚊帳の中に入れられ、蚊帳の中から障子を細めに開けて稲光の
走りを見ていた頃を思い出します。

年ごとに音の種類は変わっても季節の音は幼い頃も今もあまり変わっていないのを嬉しく思うことがあります。

これは音とは話題が少しはずれますが、昨年、お茶のお師匠様の墓参に京都の妙心寺を訪れた折り、丁度旅から帰られた院の老師様と偶然に花園駅でお会いしました。私は墓参の旨を告げ徒歩で霊雲院に向かい、留守居の方に許しを得て院の北側の墓地に廻り墓前に額衝いたところ背後に人の気配を感じ振り返りますと老師様と旅にも同行された院の尼僧の方が立っておられ、ただ一人の参詣者のため墓前でお経をあげて下さいました。その後、老師様の部屋に招じ入れられ本と旅の土産をいただき少ない言葉を交わしましたが後から音の感じがまるで無かったのに気づきました。

空気という媒体が感じられないのです。

今も不思議な気がします。

これを書きながらフト我に返りますと部屋の暖房器がうなっているのが耳に入りました。これが今の冬の音でしょうか。

(内科開業医)